

進化としての歴史

—エドガール・キネと『アハスヴェリユス』をめぐる—

戸田吉信

進化という語は、フランス語では、「Évolution」であります。この語は比喩的には、たとえば「l'évolution économique」といったように、「développement」ないし「accroissement」などと同じ意味に使われますが、本来は、生理学、さらには進化論上の用語であります。雛が卵から孵化する、蝶が蛹から脱皮する等、形態の変化を伴った生物の生長をいい、近代においては、ダーウィンの進化論、また過去を内包する時間である持続(durée)の観念によって生命進化の現象を説き明かした、ベルグソンの『創造的進化』(L'Évolution créatrice, 1907)等、生物生成史学の新しい地平を切り拓く用語として用いられたことは、周知のとおりであります。

したがって、「Évolution」は「Progrès (進歩)」とは、明確に一線を画しています。というか、画していました。本日の講演は十九世紀初頭を対象としていますから、リトレの辞書を援用しますと、「Progrès」とは、リトレの定義によれば、第一義的には、「Mouvement en avant」であり、「Ce qui avance dans le temps」であります。時間を経れば、改良・改善がなされていく道理でしょうか、そこに価値観というか善の観念が生じてまいります。すなわち、「Toute sorte d'augmentation, d'avancement en bien」、いわゆる「進歩」「発展」の概念であります。

現代に生きる私たちには、もはや「進歩＝価値」とはストレートに信じられない、少なくとも、そこには若干のためらいや逡巡があると思われませんが、十九世紀においては、この「Progrès」という語は、人類の期待をになうキーワードであったことは、まぎれもない事実なのであります。

一方、「Évolution」のほうは、そもそも生物学的個体の努力を超越したところで展開されるわけですから、善悪の観念を超えていると申しますか、本来、価値判断にはなじまないといえます。卵から小魚になっていくのが、善か悪かと言ったって仕方がないでしょう。

ところが、この「Évolution」の概念は、近代の歴史学、歴史哲学の根幹に据えられたところがありまして、本日お話してみたいと思うのは、そうした歴史家の典型的な一人だったエドガール・キネ(Édgar QUINET, 1803-1875)についてであります。あらかじめ結論めいたことを申しておけば、キネは、人類の進化がある段階に至ったとき、進歩の観念を適用するにふさわしい状況になる、と考えていたようです。

再びリトレを援用すれば、「Évolution historique」として、「le développement des sociétés et de leur civilisation suivant un ordre déterminé」と、付随的な説明がなされていますが、これは明らかに近代の観念だったように思われます。

I.

私は、キネという人物が以前から気になっていました。歴史家で、かつ亡命の政治家でもあったキネはまた詩人でもあり、『アハスヴェリウス』(*Ahasvérus*, 1833)という「さまよえるユダヤ人」伝説に想を得た長編叙事詩が、その詩作のひとつにあります。この作品は、ゲーテの『ファウスト』(「悲劇の第一部」とともに、若き日のフロベールに深甚な影響をあたえ、その痕跡は、晩年の大作『聖アントワーヌの誘惑』にまで影を投じているからであります。

しかし、ここには厄介な問題が介在します。フロベール自身、キネについてもまた『アハスヴェリウス』についても、みずから語ることをしていないのであります。周知のように、『聖アントワーヌの誘惑』には、いわゆる決定稿(1874)のほか、初稿(1849)、二稿(1857)と称されるものがあり、その他、いわゆる初期作品群の中にもこれに収斂されていくと思えるものが幾つか存在します。『地獄旅行』(*Voyage en enfer*, 1834)、『地獄の夢』(*Rêve d'enfer*, 1837)、『苦悶』(*Agonies*, 1838)、『死者の舞踏』(*La Danse des Morts*, 1838)、『スマール』(*Smarh*, 1839)といった作品がその主たるものですが、マクシム・デュ・カンが二度ばかり、例によって無責任な断定(Maxime Du Camp, *Souvenirs littéraires* I. p.168, p.219)を行っている以外に、フロベール自身がいつキネの作品を読み、どういった感想を抱いたかについて、いわば確たる証言がないのであります。

『ファウスト』についてと同様、この場合も幾つかの説があります。いま、詳細に述べることはしませんが、この頃のフロベールに大きな思想的影響を及ぼした年長の友人で、夭折した神秘思想家のアルフレッド・ル・ポワトヴァンが、1837年3月24日付けのルーアンの新聞『コリプリ』紙に『アハスヴェリウス』と題する詩編を掲載しているところから、フロベールがキネを知ったのは、おそらくポワトヴァンを介してであろう、そしてその時期は1837-38年頃ではなかったかとする、ジャン・ブリュノー教授の見解(Jean Bruneau, *Les Débuts littéraires de Gustave Flaubert*. p.22)がもっとも妥当ではなからうか、と私は考えております。

II.

西欧ロマン主義の心性は、「さまよえるユダヤ人」伝説に深い詩の源泉を汲み取ったようです。改めて言うまでもありませんが、この伝説は、あるユダヤ人の

靴屋が、処刑のためカルヴァリオの丘に登って行くキリストから、しばしの休息と水をもとめられ、これを拒んだため、主の呪いを受けたというものです。彼には死の安息さえ許されず、永遠に、世界をさまよい歩く宿命を背負うことになります。この伝説は、各地にある「さまよひ」と伝承の集大成といった観をなしており、そこにあるのは、キリスト教対ユダヤ教の対立、また亡国の民として世界中に散ったユダヤ民族迫害の物語でしょうか。ともかく、近代ドイツではシュバルトやゲーテ、イギリスではT・パーシーの『イギリス古歌拾遺集』(1765)、これらに強い影響を受けて、ワーズワース、またシェリーが伝説を長編の詩にうたいあげています。フランスではキネの雄渾な詩編があり、またペランジェのシャンソンは広くこれを広め、ウージェーヌ・シュエの小説『さまよえるユダヤ人』(1844-45)は、当時の人道主義的社会思想の潮流にのって、文字通り、洛陽の紙価を高らしめたといえます。

その背景に、ロマン主義固有の放浪と漂泊の精神風土があることは否めませんが、これとは別に、民衆レベルでは、行商人たちが売り歩く仮綴じ版や、旅芸人の語り手や歌い手たちによって、この伝説は以前から広く普及していたようです。十九世紀初頭のフランスでは、『キリスト教紀元33年以来、絶え間なく歩き続けている「さまよえるユダヤ人」の驚くべき物語』と題された小冊子が、毎年のように版を改め、行商人たちの手で草深い田舎にまで持ち運ばれていました。少年キネがこの伝承と初めて遭遇したのは、こうした民衆版を通してであり、後年、彼は『わが思想の歴史』(*Histoire de mes idées*, 1858)において、そのときの模様を詳しく語っております。

さて、キネの最初の全集は1857年から58年にかけて書肆パニエールから刊行され、『アハスヴェリユス』はその第七巻に収録されていますが、これに『覚え書き、さまよえるユダヤ人』(*Les Tablettes du Juif Errant*, 1822)と題する小品が付されています。『覚え書き』は著者が十九歳のとき、青春の迷いのただ中で書きあげた処女作ですが、キネは並々ならぬ愛着をもって、人類の運命に対する深い思索の果てに結実した、雄渾、長大な詩編のかたわらに、これを配したように思われます。

事実、『わが思想の歴史』と『覚え書き』を併せ読むとき、ナポレオン帝国が瓦解する過程の中で人となった青年たちの崩壊感覚、不安、焦り、そして歴史の意識といったものが、手にとるように伝わってくるのであります。

一言にしていえば、『覚え書き』の中でキネは、十八世紀的教養からの脱皮、そして新時代の学問である歴史への目覚めという、自らの精神の軌跡を語っているといえいいでしょうか。この点に関して、私自身すでにインクを流したので、ここでは、簡単に述べるにとどめます。

フランス中東部、田舎の有力者の家系だったキネの初等教育は、母によってなされました。キネの母は、批判的精神、中庸、明晰、繊細、エスプリ、寛容、諧謔といった、いわば十八世紀的精神のもっともよき部分を体現したような女性で、キネが七歳のとき、シェークスピアを読むことから始め、ラシーヌ、コルネイユ、モンテーニュへと続け、十歳頃にはヴォルテールのコントをすべて二人で読破したといえます。

『覚え書き』の主人公イサク・ラケダムの経験は、一見、『カンディード』のそれときわめて似かよっています。ウェストファリアの城を出て以来、どこに行っても、カンディードを待ち受けているのは迫害と不幸の運命であり、人々の愚劣が織りなす残酷なドラマであります。そして、それはそのまま、古代から中世、近世、近代へと、時空の旅を続けるイサクの味わう辛酸でもあります。いつの時代、いかなる場所に行こうと、人間たちは残虐で、悪意にみち、イサクにとって世界はいっさいの脈絡を欠いた、不条理の連続のように思えるのです。

しかしながら、両者には決定的な違いがひとつあります。カンディードは、自分の身に降りかかってくる悪しき運命に盲目的に巻きこまれ、いたずらに翻弄される、つまり受け身の姿勢に終始するのであります。師のバングロスの説く哲学は、世界の無意味と不条理を不動の絶対として容認し、これを受容することでありました。その最終の英知は、諦めと逃避、あたかも有為転変の世を捨てる東洋の賢者のように、世界を断念せよというものであります。すなわち、「わが庭を耕すべし」*«Il faut cultiver notre jardin.»*。

これに対してイサクは、人々の蒙昧によっていかに迫害されようと、たんに千八百年に渡る時空の旅人として、歴史の傍観者にとどまることはしません。彼は歴史のひとつま、ひとつまに能動的に関与していこうとするのです。歩き続けて近代まで至った彼が、啓蒙と光と寛容の世紀においてさえ、相も変わらず、人間の狂気と蛮行が激流のように荒れ狂うのを前にして（フランス革命でしょうか）、「寓話の農夫のように、水が引くのを待って河を渡るべく、静かに、岸辺に腰をおろす」ことで作品は終わります。時が経ち、激流がおさまれば、また向こう岸に歩いて行こう。向こう岸とは、未来であります。「わが庭を耕す」、カンディードの時間はそこで閉じられているのに、イサクにとって時間は、未来に向かって開かれているというべきでしょう。それは生成する時間であります。千八百年を生きた彼は、時代は絶えざる変化の中にあることを学んでいるのです。過去を知るとは、現在を過去と比較して判断し、未来に展望をもつことでもあります。カンディードの笑いの背後にある涙は、ここには存在しません。*«Attendre»*、つまり、人類にとってよりよき時代が到来することを確信し、それを待つ、これがイサクの哲学であります。

III.

生成・変化としての歴史（これが«Évolution»ですが）の発見と自覚、これこそ、ヴォルテール流の哲学、すなわち、十八世紀と袂を分かち、新時代の脈動を告げるものだったといえます。『覚え書き』には、そのような、キネ個人と、時代精神の芽生えがスケッチされているように思えるのであります。そしてキネの場合、個人的な経験がこれに大きくあずかっておりました。

1814、15年の二度にわたる連合軍によるフランス侵入は、少年キネの脳裏に強い印象を残し、忘れ難い映像を焼きつけました。キネの故郷はフランス東部のブルに近いセルティエヌという小さな街で、近郊には太古の面影をそのままに伝える、広大な無人の原野が開けておりました。忘れられたこの小邑にも、あたかも民族の大移動さながらに、ハンガリヤ兵を主体にした、東欧・スラブ系の諸民族が押し寄せたのです。文化的劣性をまる出しにした彼らの一挙手一投足は、さながら、太古の蛮族を彷彿させるものがあつたといひます。この少し後、リヨンのコレージュに入学したキネは、そこで古代、中世の歴史書、思想書を片っ端から読みふけるのですが、タキトゥスの語る大国の興亡と、追われてはまた再起する皇帝たち、堰を切ったような異民族の侵入は、このときの自分の経験と二重写しになった、またシドニウス・アポロニウスの記述する、口髭にバターを塗りたくって喜ぶ金髪の蛮族兵は、そのまま自分が見た光景だったと語っています。

ともかく、大革命からナポレオン帝国の樹立、ヨーロッパ全体を巻き込んだ度重なる戦争、そして帝国の瓦壊、百日天下と王政復古、といった未曾有の激変を通じて、人々に歴史の感覚と意識は醸成されていったのであります。キネもまた、「ひとつの帝国の崩壊こそが、私の最初の教育だった」と、『わが思想の歴史』の中で述べています。

とはいえ、1820年、エコール・ポリテクニク入学のためにパリに出たキネは、22年に『覚え書き』を書いた頃、いかなる道に進むべきか、迷いのさ中にありました。不拔の大帝国が崩れ去った廢墟に立つ青年たちにとって、過去はもはや確固とした依り所たり得ず、未来はまだ鮮明に姿を見せてこない。現在は、空虚と混乱でしかない。将来、何を指すべきか？ そのために、いま何をなすべきか？ そのような若者の不安、焦り、苦悩を語る『わが思想の歴史』の個所は、おそらく、この若き日の回想の中でもっとも美しいページを構成し、早熟の天才児ミュッセの『世紀児の告白』（*La Confession d'un enfant du siècle*, 1836）と、まさしく同じ旋律を奏でています。

世紀児キネが、ヘルダー（1744-1803）の歴史哲学に魅せられ、ドイツ観念論の思想を学び、歴史学を自己の天職として選ぶのは、『覚え書き』を書いた直後であります。

余談ですが、十九世紀に至るまで、フランスにおいて、固有の意味で「歴史家」という呼称を冠するに値する人間は、かつて存在したでありましょうか。歴史書といえばボシュエの『世界史序説』(*Discours sur l'histoire universelle*, 1681)、モンテスキューの『ローマ人の盛衰に関する考察』(*Considérations sur les causes de la grandeur des Romains et de leur décadence*, 1734)、ヴォルテールの『シャルル十二世伝』(*Histoire de Charles XII*, 1731)、『レイ十四世の時代』(*Le Siècle de Louis XIV*, 1751)、『諸国民の習俗と精神についての論考』(*L'Essai sur les mœurs*, 1756)などがすぐ頭に浮かびます。だがボシュエについては時代的な制約とともに、王太子教育のテキストという限界があり、モンテスキューとヴォルテールのものは、厳密な史料批判という作業は別にして、すぐれた史観をもった歴史書であることは間違いないのですが、いわば先駆的業績であります。それにこの二人を歴史家と称するのは、いささか踏いがあるでありましょう。

キネが身を震わせるような感動をもって発見した歴史学は、十九世紀の新しい学問でした。その前提として、「帝国の崩壊」がもたらした「深い悲嘆と空虚」(『わが思想の歴史』)の感情が青年たちに共有されておりました。これなくしては、ミュッセはもちろん、ラマルティーヌの『瞑想詩集』も、ヴィニーの『チャタートン』も、ジョルジュ・サンドの『わが生涯の歴史』も、そしてある意味で、スタンダールの『赤と黒』もなかったのではないかと思うのであります。

十九世紀史学の特徴として、ひとつには「人類」(*Le genre humain*, *L'Humanité*)の起源から現在まで、人類という総体に対する深い関心があります。いまひとつはシャトブリアンは別格とし、台閣に列したティエールとギゾーを別にすれば、オーギュスタン・チエリー、ミシュレ、キネ、いずれも豊かな想像力を駆使し、言葉によって彩色をほどこした詩人だったと思うのです。世界史というより人類史、人類の歴史が決定的な段階にはいったという強い自覚と、使命感が、十九世紀フランスの文学と歴史を貫いています。

IV.

パリに出たキネは、いつか、コレージュ・ド・フランスで行われていたヴィクトール・クーザン(1792-1867)の講義に強い感銘を受けました。が、日ならずして、一世を風靡したこの若き天才学徒の折衷主義なるものが、ドイツ観念論を、明晰を旨とする、理性の言語によって置き換えているにすぎない、と思うようになったといいます。そして、無名の青年に、自らの内面と想像力を重視する道を選ぶよう助言したのが、そのクーザンでした。ゲーテとカント、そしてヘルダーの『人類史哲学の諸観念』(1784-1791)と出会うことによって、キネの進むべき道は、揺るぎない天職として自覚されるのであります。

この書物の翻訳を志し、すでに1825年、『人類史哲学への序説』(*Introduction à la philosophie de l'histoire de l'humanité*)と題する論文を刊行したキネは、『アハスヴェリウス』において、伝説のユダヤ人の相貌のもとに、ヘルダーに学び、かつヘルダーを超える、自らの歴史哲学、人類史哲学を託す、壮大な叙事詩を書きあげたというべきでしょう。

「さまよえるユダヤ人」アハスヴェリウスは、みずみずしいロマン主義的感性を備えているように見えます。人間の狂気に絶望して、激流がおさまるのを待つ『覚え書き』のイサクには、齢千八百歳の老人の疲れのようなものが感じられなくもありません。世界の終末、「最後の審判」の日まで歩き続けるアハスヴェリウスは、一体何歳になるのでしょうか。その老齢にもかかわらず、自分を拒否することのない新しい神を求め続ける彼の心は、不安にみち、懐疑にさいなまれています。その不安と疑惑は、確実に、世紀初頭の青年たちの「世紀病」と響き合うものが感じられます。じかしながら、「世紀病」も、時空を超えて繰り広げられる人間の愚かしい営みも、彼に向けられる迫害も、メフィスト的な「死の神」の誘惑も、より正義の神をもとめて行くアハスヴェリウスの歩みを留める理由にはなりません。

これによってアハスヴェリウスには、たんなる「さまよえるユダヤ人」伝説を超えた、普遍的人類の象徴としての意味が付されるのであります。そしてまた、それがヘルダーによって開眼された「歴史」の意味でありました。端的に言えば、人類は決してひと所に留まり、停滞しているのではなく、時間と空間の中で絶えざる動きの中にある。それこそが人類の歴史であると説くことによって、ヘルダーは帝国崩壊後の風化した社会に生き、未来が閉ざされていると感じる青年に、もはや神意や摂理によって動くのではなく、人類の内発的な動きとしての歴史、エヴォリューションを覚醒させたのでした。時間と空間の中での絶えざる変化、動きを端的にしめすのは「歩み」(Marche)であり、キリストの十字架を背にして永遠に、この世の終わりまで、休むことなく歩き続ける「さまよえるユダヤ人」は、キネにとって、人類の運命を託す格好の象徴となったのであります。

その前に、「天地創造」(Création)があり、これを通じてヘルダーの«Évolution»をさらに徹底させた、キネの«Évolution»の観念が明らかになっていきます。

『アハスヴェリウス』は、Première journée; La Création, Deuxième journée; La Passion, Troisième journée; La Mort, Quatrième journée; Le jugement dernierの四部に分かたれ、これにPrologueとÉpilogueが付されています。

第一部は、遥かにキリストの到来を待つ異教の世界。いまだ生命の存在しない世界の曙に、孤独と不安をかこつ大洋、最初の生命である伝説上の怪物と巨人族の登場、これらの争闘と洪水の後、至高の被造物である人類が出現します。人類は三つの部族を形成し、一つはガンジス河流域へ、一つはオリент、メソポタミヤ地方へ、いま一つはナイル河流域へと散っていく、大移動を行います。人類

最初の「歩み」というべきでしょうか。自然の猛威、人間の中にある獣性、荒ぶる神々、これらを克服していく過程で、砂漠の中からヨーロッパのあらゆる宗教の源泉になった一神教、偶像ではなく人間の神が誕生します。砂漠とは、世界の果て、自然の欠如した場所、誰も住まぬ所であります。そこから出現した人間の神は、最初の一大宗教革命というべきものでした。

ユダヤ教からキリスト教へ、キネは、キリスト教を先行のオリент諸宗教から分かつものは、前者においては自然と偶像への畏怖と崇拜がその根底にあったのに、キリスト教では信仰は魂の問題である、つまり、人間性の問題が中心に据えられると考えるのであります。たんなる畏怖、崇拜ではなく、信じること。これによって、信仰の裏返しとしての懐疑という、近代の問題が派生します。アハスヴェリユスは、いわば「信仰」と「懐疑」の峽間にある人間といってもいいでしょう。第二日め以降、舞台は人間の歴史という次元にはいって行くのですが、同時に、ここからヘルダーを超えた、独自の歴史観が展開されていくことになりま

す。

ヘルダーにとって、進化の過程における人間の出現（生物学的なヒトではなく、自らを束縛から解放する人間）は、神の直接的な介在なくしては考えられませんでした。彼はそこに「一種の奇跡」を見るのです。これに対して、キネの歴史哲学は、神の介在、奇跡の観念をいっさい排しております。もし「奇跡」という言葉を使用するなら、すべての生命の出現、いっさいの歴史が奇跡ではないか、人間には、自己の飛躍を妨げる束縛から、自らを解き放とうとする潜在的な力が備わっていると、キネは考えるのであります。束縛からの解放とは、別の言葉でいえば「自由」への欲求でありましょう。かくて、歴史とは、人間が時間の中で「自由」を獲得していく過程、その場となるのであります。

もう少し議論を続けます。ヘルダーが神の手を見た人間の解放は、キネにとっては、物質の束縛と、外界の拘束から離脱しようとする人間の所為、人間にあえられた内面の力の発露でありました。幼虫から蛹、そして蝶という進化、また長い年月をかけた固体の変貌は、決定論の法則に従ったものです。これに対して、人間の進化とは、内面の力（force morale）によって偶発性（contingences）の重みと闘うことであり、むしろカントの理想主義（よく知られた一節をフランス語で言えば、*«le ciel étoilé au-dessus de nos têtes et la loi morale au fond de nos cœurs.»*）に一脈相通じるものがあるといえましょう。人間の進化＝歴史とは、まず物質の束縛、拘束との、ついで人間精神内部の暗い幻影、晦冥に対する闘いなのであります。

先に述べましたように、オリントの異教の神々に拮抗する形で出現した砂漠の一神教（ユダヤ教からキリスト教）に、キネはヨーロッパ諸価値の源泉を見て

おりました。それは信仰と表裏一体の関係にある疑惑、懐疑、つまり「悪」が登場することによってであります。「悪」とは否定、否認であり、ここから「善」と「悪」、「永遠」と「虚無」の二元論、あるいは二項が対立し、闘争が開始されます。「われはつねに否定する精神なり」（『ファウスト』『悲劇の第一部』）と呼号して、ファウストと対をなすメフィストでしょうか。しかしキネにとって、悪の出現こそは、同時に、人間の思考の進歩を証明するものであります。なぜなら、これによって人間は、何が価値なのかを問い、価値を識別することによって、行為を選択することが可能になるからであります。「内面の世界の啓示という以外に、『福音書』とはなんであろうか？」（『イエスの生涯検証』）

人類はその長い歴史の過程で、絶えず、より高次な自分自身のイメージをもとめて歩んできた、これが進化であります。進化には、そもそも価値判断はなじまないのですが、ただ人類の進化に対してのみ、価値の判断は下せるのであります。新たな発見や新しい思想（ガリレイでもニュートンでも、またフランス革命でもいいのですが）は、それ自体、奇跡の名を冠するにふさわしいものですが、それは決して神の介入によるのではなく、人類の内面の進化によって促進された、とキネは考えます。進化とは「事物の秩序そのもの（l'ordre des choses）が、人類をして変化に向かわせる」（『人類史哲学への序説』）ことであります。キネにとって、歴史科学は、変化の方向と意味を明らかにし、未来に向けた精神的方向性をしめす「歴史哲学」を内包することによってのみ、意味をもつのであります。

ただ人間だけが自らを固定し、一個所に留まっていることをしない。「一体、何を望んでいるのか？ 何をもとめているのか？ 彼は自分でもそれを知らない。しかし、彼は歩み、揺れ動き、自分で建てたものを壊し続ける・・・彼は永遠の追跡でもって無限を追う」（『諸宗教の精髓』）。まさに、永遠の旅人のイメージではありませんか。「人類は、あたかも眩暈に囚われたかのように、沈黙する宇宙の前に、廃墟から廃墟へと、足を止める場所を見出すことすらなく、ひたすら歩み続ける。家族のもとを離れ、倦怠にみち、駆り立てられた、旅人なのだ」（『人類史哲学への序説』）。

まさしく、アハスヴェリュスそのものではありませんか。キネがこの文章を書いたのは1825年であり、伝説の「さまよえるユダヤ人」は、人類のエヴォリューションを象徴するにふさわしい存在として、早くからキネの脳裏にあったと見ることができるとあります。ご静聴ありがとうございました。